

長岡京左京四条三坊十四町跡 第 645 次
発掘調査報告書

2022 年 3 月

株式会社 地域文化財研究所

例 言

1. 本書は、京都市伏見区羽束師菱川町 544 - 1 において、敷島住宅株式会社京都支店が計画された宅地造成工事に伴い、株式会社地域文化財研究所が同社より委託を受け実施した発掘調査の報告書である。(京都市番号：20NG535)

2. 上記の調査は、宅地造成範囲の内 97.4 m²を対象として令和 3 年 7 月 26 日から令和 3 年 8 月 25 日まで現地調査を行った後、株式会社地域文化財研究所京都支所において整理作業を実施した。

本遺跡の現地調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の検査・指導と、検証委員会の学識経験者として龍谷大学文学部歴史学科教授 國下多美樹氏、近畿大学文芸学部文化・歴史学科教授 網伸也氏により調査指導をいただいた。

3. 上記事業に関する発掘調査担当者は江崎周二郎、影山美智与、市田英介である。

本書の執筆は、研究所所長福永信雄の指導のもと、江崎、影山、市田、松田直子が行った。

4. 本書掲載の遺物整理作業は、須藤歩、宮原温美、阪田恭子が行った。

5. 現地作業、測量についてはやましる文化財株式会社から協力を得た。報告書作成に際し、下記の方々にご指導、ご助言をいただいた。記して謝意を表します。

網伸也、馬瀬智光、奥井智子、國下多美樹、黒須亜希子、鈴木久史(敬称省略・五十音順)

本 文 目 次

I はじめに	1
II 遺構	3
III 遺物	10
IV まとめ	15

挿 図 目 次

図 1 周辺遺跡分布図	1
図 2 長岡京条坊復元と調査位置	2
図 3 明治二十年測量図での調査位置	2
図 4 東西トレンチ断面図	5
図 5 東西トレンチ断面図	7
図 6 第 1 遺構面 平面図	8
図 7 第 1 遺構面 遺構断面図	8
図 8 第 2 遺構面 平面図	9
図 9 第 2 遺構面 遺構断面図	9
図 10 下層確認トレンチ位置図	11
図 11 下層確認トレンチ断面図	11
図 12 出土遺物実測図	13
図 13 池状遺構出土瓦質土器甕・木杭 実測図	14

図 版 目 次

図版 1～2 遺構	16～17
図版 3～5 遺物	18～20

I はじめに

1. 調査に至る経過

調査地は京都市伏見区羽東師菱川町 544 - 1 に所在する。当地における宅地造成に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課）により試掘調査（20NG535）が行われた。その結果、GL-0.3～0.5m において羽東師菱川城に伴う濠の北肩と見られる落ち込みやピット、GL-0.6m の地山上面では長岡京期の土坑や東西方向に向く溝が検出された。このため宅地造成範囲の内、遺構が保護されず破壊される擁壁部分を対象として、発掘調査の実施が指導された。

調査は開発者の敷島住宅株式会社京都支店から依頼を受け、株式会社地域文化財研究所が実施した。

2. 位置と環境

調査地は桂川の右岸から西に約 1.6km 地点の沖積低地に位置し、地表面の標高（T.P.）は約 11.8m である。また、調査地の東約 350m 地点に農業用の幹線水路として整備された西羽東師川が南北に流れる。かつては水田が一面に広がっていたが、1963 年の名神高速道路開通以降宅地開発が著しく進み、現在では調査地南側は住宅地が広がっている。調査地は長岡京跡の推定復元では左京四条三坊十四町跡の西辺部に相当し、東三坊坊間東小路が当該地を通る。また、室町將軍家の家臣である西岡衆の居城と目される羽東師菱川城推定地の北に隣接する。

近隣では、平成 25 年 5～6 月、平成 26 年 4～5 月に公益財団法人元興寺文化財研究所（以下、元興寺文化財研究所）によって行われた第 561 次発掘調査において、調査地の南東約 80 m に位置する地点で長岡京四条間南小路とそれに伴う南側溝や、羽東師菱川城に伴う北濠が検出されている他、平成 24 年 11 月、12 月、平成 25 年 3 月、11 月に文化財保護課により行われた試掘調査において、調査地の東約 100m 地点で長岡京期の柱穴や鎌倉時代～江戸時代までの濠や溝等が検出されている等、長岡京期～近世までの城館や集落が存在したことが確認されている。

3. 調査経過

調査範囲は、対象地北側に 2.0m × 32.0m の東西トレンチ、西側に 2.0m × 23.0m の南北トレンチの「L 字状」を呈する。南北方向トレンチの南端は、東に 1.0m × 1.0m の拡張を行った。はじめに試掘調査結果に基づき耕作土を T.P.=11.3m まで機械掘削したのち、人力による掘削を行い、T.P.=11.0m の灰白色シルト上面で遺構を検出し、記録を行った。全景写真や実測図の作成を行った後、機械掘削により



図 1 周辺遺跡分布図

灰白色シルト層を除去。東西トレンチでは T.P.=10.9m の灰白色細粒砂～中粒砂上面で、南北トレンチでは T.P.=11.1m の灰黄褐色シルト上面で遺構を検出した。全景写真、実測図の作成を行った後、下層確認用のトレンチ①～④を設けて、断面写真撮影、実測図の作成を行った。

遺構検出時、遺構完掘時に文化財保護課による検査、指導を受けた。また、検証委員である龍谷大学文学部歴史学科教授 國下多美樹氏、近畿大学文芸学部文化・歴史学科教授 網伸也氏に調査指導をいただいた。

調査は令和3年7月26日(月)から開始し、令和3年8月25日(水)に終了した。なお、8月12日(木)～8月20日(金)は、雨天により作業中止となった。以下調査経過の月日等を記す。

7月26日(月)午前中に調査範囲設定、機械掘削を開始し、午後に機械掘削終了。遺構検出。7月29日(木)遺構検出状況写真撮影。文化財保護課検査。7月30日(金)遺構掘削作業終了。完掘状況写真撮影。測量。8月2日(月)機械掘削開始。8月4日(水)遺構検出。8月5日(木)南北トレンチの遺構検出状況写真撮影。8月10日(火)國下氏、網氏による指導。東西トレンチの遺構検出状況写真撮影。8月11日(水)遺構掘削作業終了。完掘状況写真撮影。測量。文化財保護課検査。8月23日(月)機械掘削。文化財保護課検査。8月24日(火)遺構面除去後、直下層の全景写真撮影。測量。8月25日(水)下層確認トレンチ設定。機械掘削、写真撮影、測量を行い調査終了。

II 遺構

1. 基本層序(図4・5・11・図版2)

- | | | |
|-----|---------|---|
| 第1層 | | 現代耕作土。 |
| 第2層 | 10YR5/2 | 灰黄褐色シルトに細粒砂混じる。旧耕土。調査区全域で確認した。 |
| 第3層 | 10YR6/1 | 褐灰色シルトに細粒砂混じる。鉄分とマンガンを含む。床土。調査区全域で確認した。 |
| 第4層 | 10YR7/1 | 灰白色シルト。鉄分とわずかにマンガンを含む。この層の上面が遺構検出面である(第1遺構面)。土器や径1～4mm以下の礫を含む整地土である。調査区全域で確認した。 |
| 第5層 | 5Y7/1 | 灰白色細粒砂～中粒砂。鉄分を含む。この層の上面が遺構検出面である(第2遺構面)。径2～10cm以下の礫と土器などの遺物を豊富に含む。東西トレンチで確認した。上面で根石の残存する柱穴(SP38、40)を検出しており、建物を建設する際に地面を平坦にするための整地土と考えられる。 |
| 第6層 | 7.5Y7/1 | 灰白色粘質シルト。鉄分を含む。東西トレンチ全域、南北トレンチ北側で確認した。 |
| 第7層 | 2.5Y8/1 | 灰白色粘土。炭化物・植物遺体含む。東西トレンチ全域、南北トレンチ北側で確認した。 |
| 第8層 | 10Y4/1 | 灰色粘土。中～極細粒砂混じる。植物遺体・径1cm以下の礫を多量に含む。東西トレンチの下層確認トレンチで確認した。 |
| 第9層 | 5Y5/1 | 灰色粘土。東西トレンチの下層確認トレンチで確認した。 |

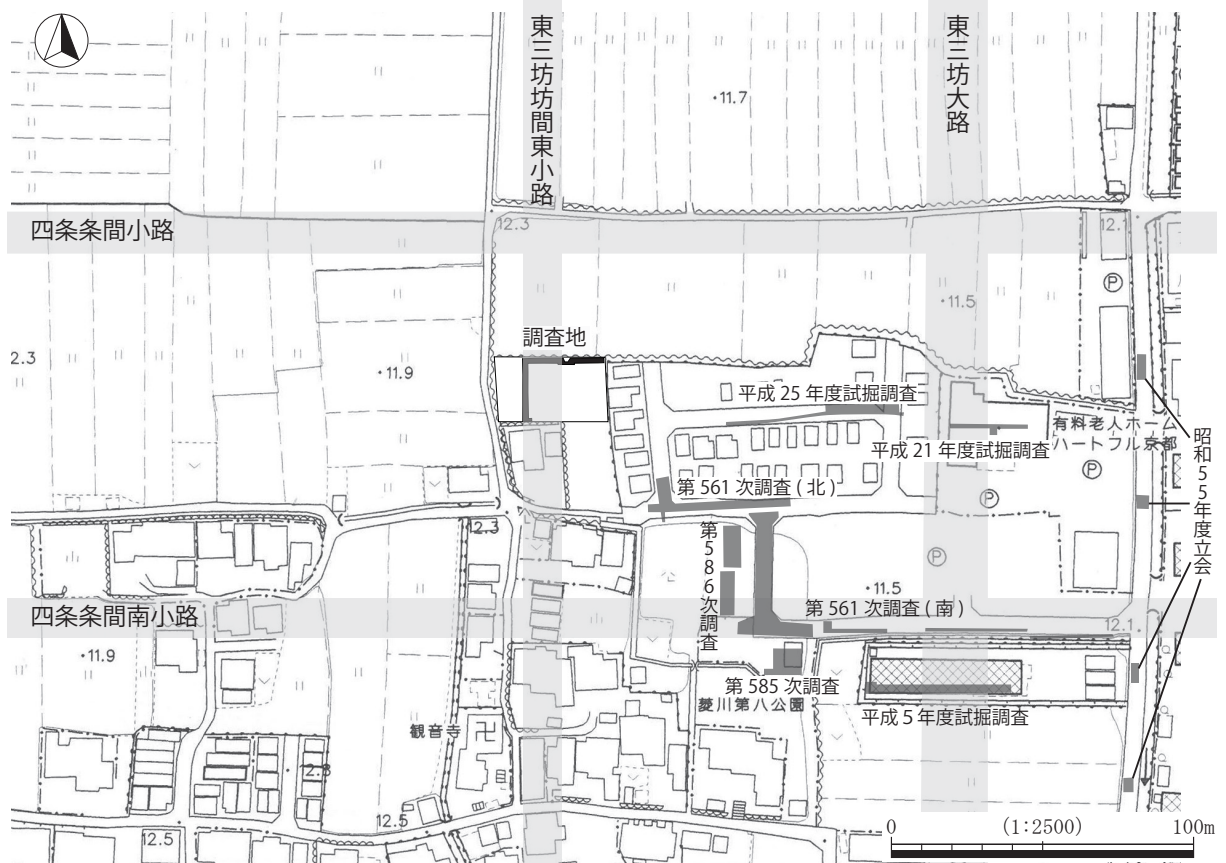


図2 長岡京条坊復元と調査位置

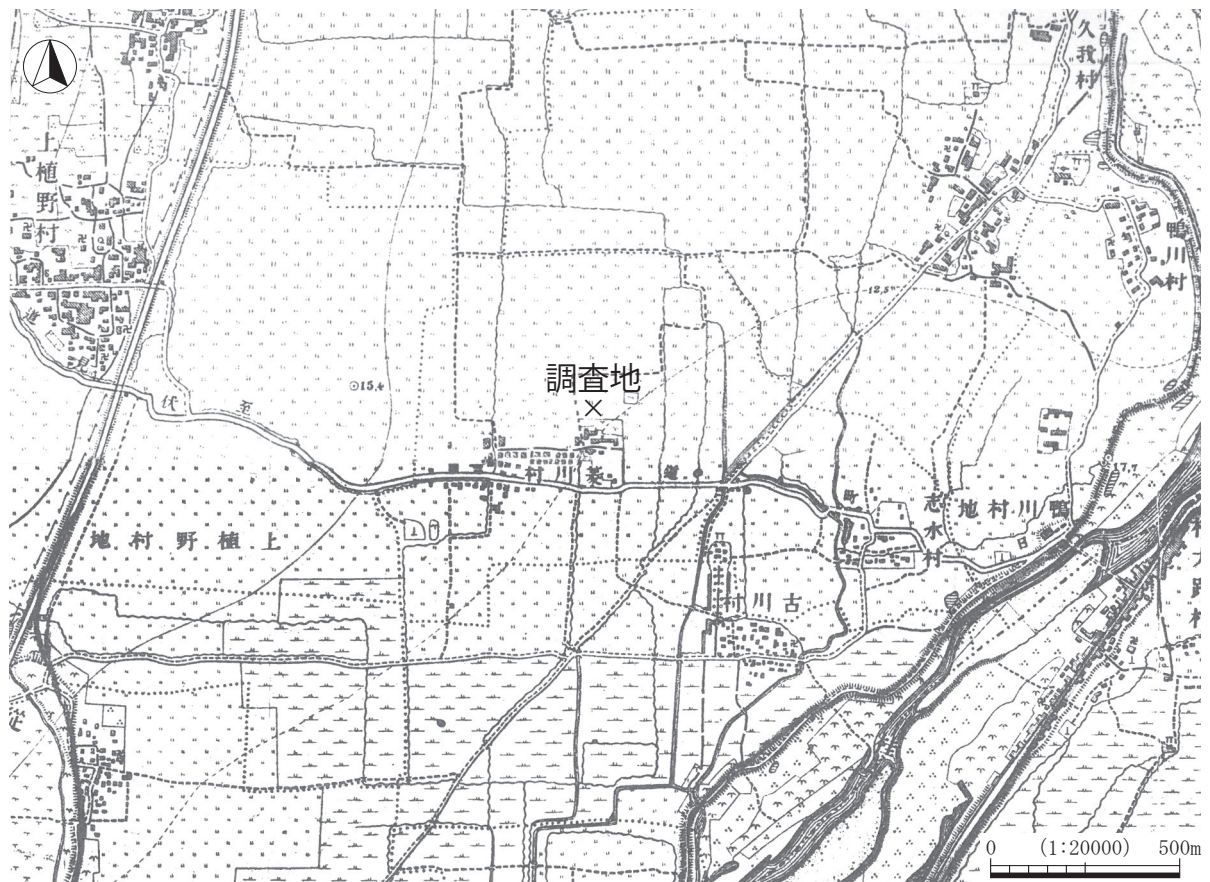


図3 明治二十年測量図での調査位置

- 第10層 7.5Y5/1 灰色粘土。東西トレンチの下層確認トレンチで確認した。
- 第11層 5Y5/2 灰オリーブ色粘土。東西トレンチの下層確認トレンチで確認した。
- 第12層 10YR6/2 灰黄褐色シルト。極細粒砂～細粒砂混じる。鉄分を含む。遺構検出面である。南北トレンチで確認した。
- 第13層 2.5Y6/2 灰黄色シルト。細粒砂混じる。やや粘質。南北トレンチで確認した。
- 第14層 10Y6/1 灰色粘土。南北トレンチで確認した。
- 第15層 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土。南北トレンチで確認した。

2. 遺構（図6～8）

遺構面は2面確認した。調査区全体における遺構の総数はピット21基、土坑12基、溝12条、不明遺構1基である。以下遺構面、トレンチ毎に概要を記す。

第1遺構面（図6）

第4層上面で溝7条、ピット12基、土坑2基を検出した。

東西トレンチ

溝（SD01、09）

南北方向の溝である。最大幅0.85m、深さ0.2mを測り、断面形状は皿形を呈する。埋土内から16世紀末期～17世紀初頭に属する丹波焼播鉢が出土した。SD09は最大幅1.8m、深さ0.12mを測り、断面形状は皿形を呈する。埋土内から土師器皿、肥前産青磁碗が出土した。

ピット（SP02～04、07、08、10、11）

SP02～04は最大幅0.4～0.55mで平面形状は楕円形を呈する。深さは0.1～0.3mである。柱痕の直径は0.15～0.2mを測る。埋土内から須恵器が出土した。SP07、08、10、11は最大幅0.3～0.65mを測り、平面形状は円形を呈し、深さは0.2～0.3mを測る。SP07、08、10は柱痕は認められなかった。SP11の柱痕の直径は0.15mを測る。SP07の埋土内から土師器小皿、肥前産白磁片が、SP08の埋土内から土師器小皿が出土した。

土坑（SK05、06）

断面形状が深皿形を呈する土坑である。SK05は最大幅0.7m、深さは0.2mを測る。SK06は最大幅0.7m、深さ0.15mを測る。埋土内から土師器小皿が出土した。

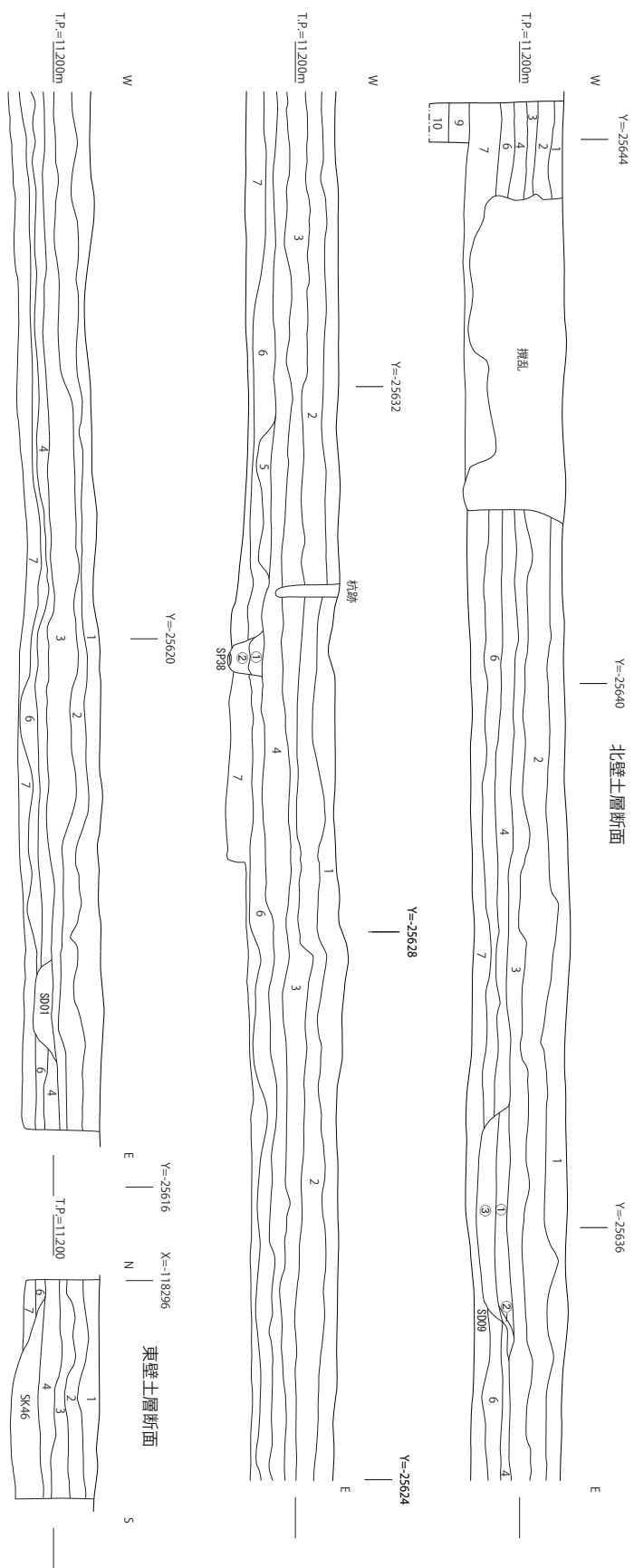
南北トレンチ

溝（SD12～15、20）

東西方向の溝である。SD12は最大幅0.5m、深さ0.25mを測り、断面形状はU字形を呈する。埋土内から須恵器が出土した。SD13は最大幅0.5m、深さ0.13mを測り、断面形状は緩やかなU字形を呈する。SD14は最大幅0.4m、深さ0.1m未満を測り、断面形状は浅い皿形を呈する。埋土内から土師器小皿が出土した。SD15は最大幅0.6m、深さ0.2mを測り、断面形状は緩やかなU字形である。埋土内から須恵器杯、土師器小皿が出土した。SD20は東側1.5m、西側2.5mと、西に向かうにつれて幅が広がる。深さは0.3mを測る。埋土内から須恵器、土師器、瓦器碗が出土した。

ピット（SP16～19、21）

SP16～18は最大幅0.3～0.4m、深さ0.1m未満～0.25mを測り、平面形状は円形を呈する。SP17の柱痕の直径は0.2mを測る。柱痕埋土内から土師器片が、掘方埋土内からは土師器小皿が出土した。SP18の柱痕の直径は0.15mを測る。掘方の埋土内から杯と思われる土師器、瓦器が出



- 第1層 現代耕作土
- 第2層 10YR5/2 灰黄褐色シルト、細粒砂混じる(旧耕作)
- 第3層 10YR6/1 褐灰色シルト 細粒砂混じる 径3cm以下の礫を含む 鉄分沈着 マンガンを含む(床土)
- 第4層 10YR7/1 灰白色シルト 鉄分沈着 マンガンわずかに含む(第1遺構面)
- 第6層 7.5Y7/1 灰白色粘質シルト 鉄分沈着
- 第7層 2.5Y8/1 灰白色粘土 炭化物・植物遺体含む
- 第9層 5Y5/1 灰色粘土
- 第10層 7.5Y5/1 灰色粘土

- SD01 10YR6/2 灰黄褐色シルト 細粒砂混じる
- SD09-① 10YR6/1 褐灰色細粒砂 鉄分・マンガン沈着
- SD09-② 10YR6/1 褐灰色シルト
- SD09-③ 2.5Y6/1 黄灰色粘土
- SP38-① 10YR6/1 褐灰色粘質シルト
- SP38-② 10YR7/1 灰白色シルト
- SK46 10YR6/1 灰色粘土 鉄分・マンガン沈着

図4 東西トレンチ断面図

土した。SP19は最大幅0.6mを測り、平面形状は楕円形を呈し、深さは0.15mを測る。柱痕の直径は0.15mを測り、小児頭大の根石が残る。SP21は南端拡張部において検出した。幅0.5m、深さ0.2mを測り、平面形状は楕円形を呈する。柱痕の直径は0.25mを測る。柱痕埋土内から土師器小皿、鉄釘が、掘方埋土内から土師器中皿が出土した。

第2遺構面（図8）

第4層除去後検出した遺構面である。遺構の総数は、溝5条、ピット8基、土坑11基、不明遺構1基である。

東西トレンチでは径2～10cmの礫や土器を含む整地土層（第5層）がX=-118298からX=-118297の間で認められ、その上面で溝1条、ピット7基、土坑11基を検出した。南北トレンチの当該地点以南では第5層は認められず、第12層上面で溝4条、ピット1基、不明遺構1基を検出した。

東西トレンチ

溝（SD36）

東西方向の溝である。最大幅0.4m、深さ0.1mを測り、断面形状は緩やかなU字形を呈する。埋土内から土師器小皿、瓦質土器羽釜が出土した。

ピット（SP30～33、38～40、44）

SP30～33、38～40は幅0.2～0.5m、深さ0.1～0.25mを測り、平面形状は円形を呈する。SP30の断面形状は皿形を呈する。SK29に切られる。埋土内から灰釉陶器が出土した。SP31の柱痕の直径は0.15mを測る。柱痕埋土内から須恵器が出土した。SP32は幅0.6m、深さ0.4mを測り、平面形状は円形を呈する。SP33は幅0.1m、深さ0.08mを測り、平面形状は円形を呈する。SP38は排水用に設けた側溝内で小児頭大の根石を検出したため平面形状は特定できず、北壁土層断面での検出となった。SP40の柱痕は直径0.2mを測る。小児頭大の根石を確認した。SP44は幅0.5m、深さ0.3mを測り、平面形状は楕円形を呈する。埋土内から土師器皿、瓦質土器羽釜が出土した。

土坑（SK28、29、34、35、37、41～43、45、46）

それぞれ平面形状が楕円形を呈する土坑である。SK28は北西隅で検出した。最大幅1.3m、深さ0.1mを測り、断面形状は皿形を呈する。SK29は長軸幅0.9m、短軸幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形状は緩やかなU字形を呈する。SK34は長軸幅1.0m、短軸幅0.5m、深さ0.1m未満を測り、断面形状は皿形を呈する。SK35は長軸幅0.6m、深さ0.1m未満を測り、断面形状は皿形を呈する。SK34に切られる。SK37は長軸幅0.7m、短軸幅0.5m、深さ0.2mを測り、断面形状は緩やかなU字形を呈する。埋土内から土師器、瓦器、灰釉陶器が出土した。SK41は最大幅1.2m、深さ0.15mを測り、断面形状は皿形を呈する。SK42は最大幅1.2m、深さ0.1mを測り、断面形状は皿形を呈する。SK43は最大幅0.7m、深さ0.1mを測り、断面形状は皿形を呈する。SK45は最大幅1.4m、深さ0.15mを測り、断面形状は皿形を呈する。SK46は東端で検出した。最大幅1.3m、深さ0.25mを測り、断面形状は皿形を呈する。埋土内から須恵器甕が出土した。

南北トレンチ

溝（SD22、23、25、26）

南北方向の溝である。それぞれ磁北から西に15度程度振れており、0.3～0.5m間隔で平行に延びる。それぞれ幅は0.3～0.5m、深さ0.1～0.2mを測り、断面形状は皿形を呈する。SD22は北側先端付近でSD23に切られる。SD22の埋土は鉄分、マンガンを含んだ灰白色シルト（7.5Y7/1）で、SD23の埋土は鉄分を含んだ灰色シルト（7.5Y6/1）である。SD25の埋土は鉄分、マンガンを含んだ

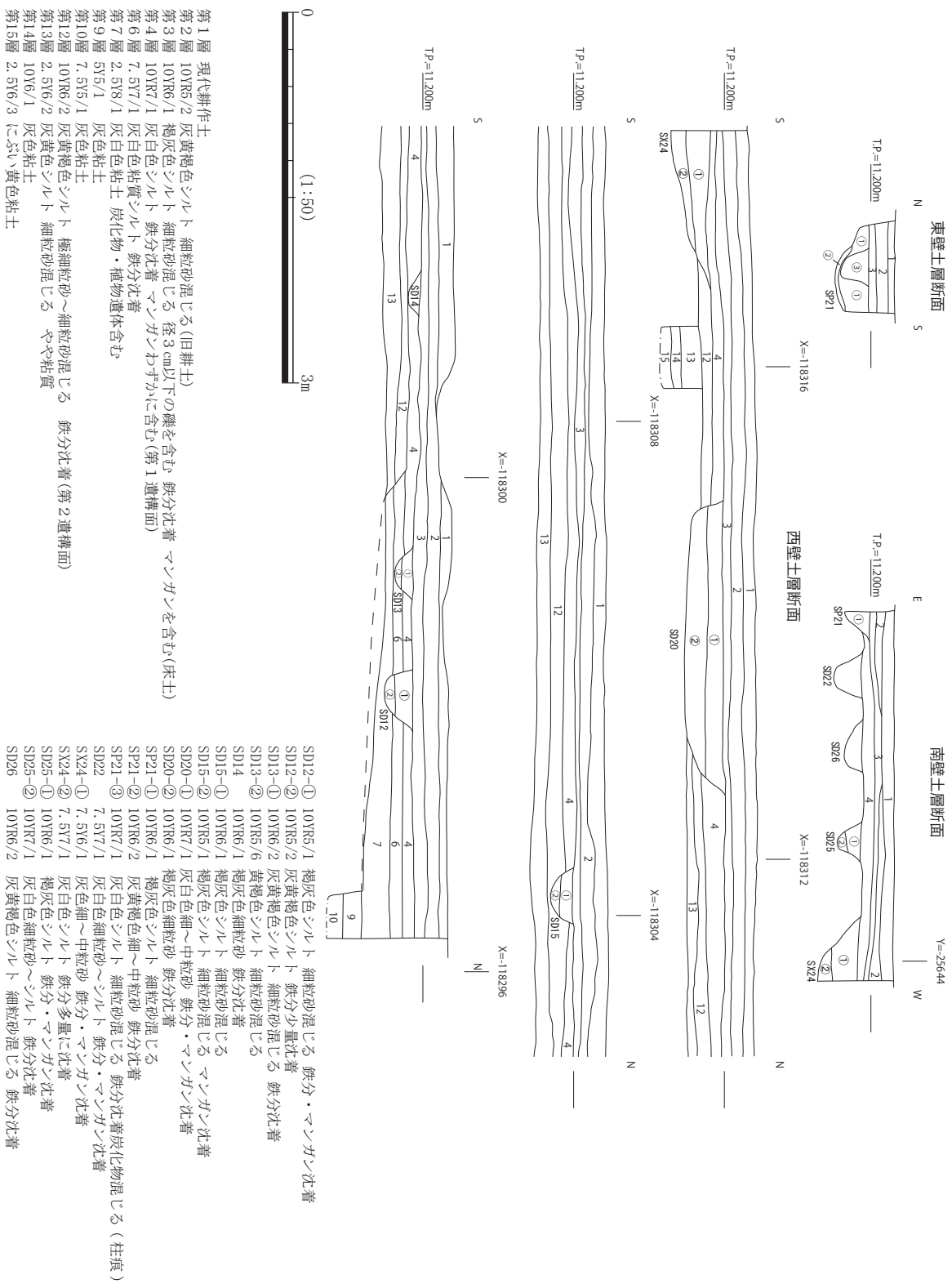
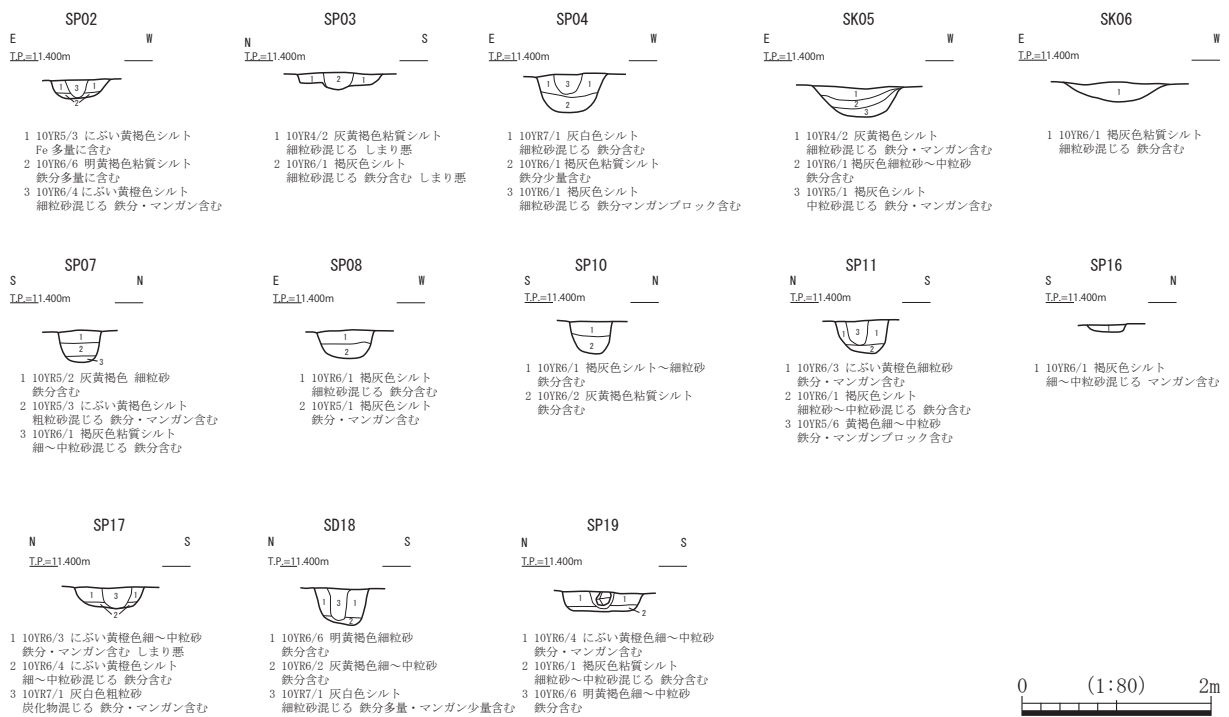
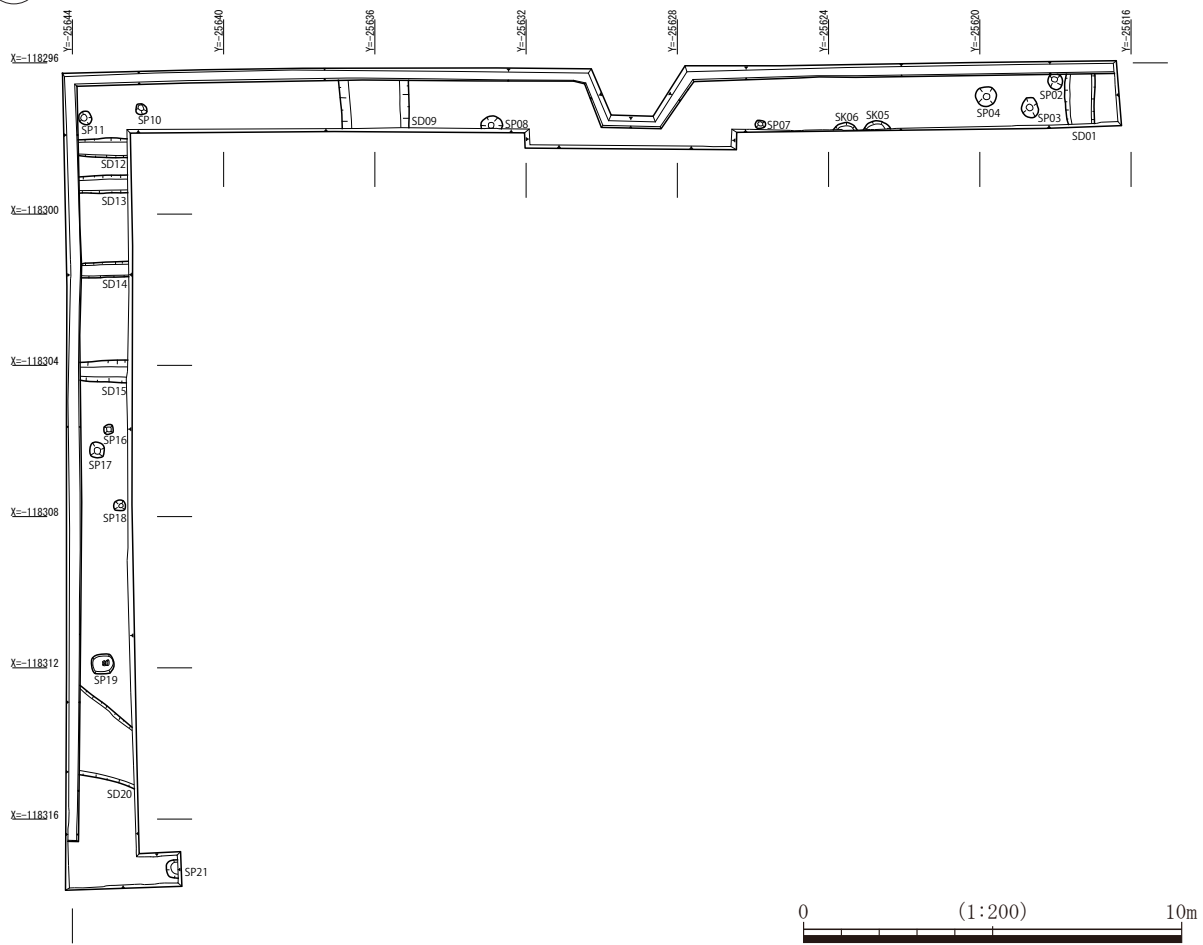


図5 南北トレンチ断面図



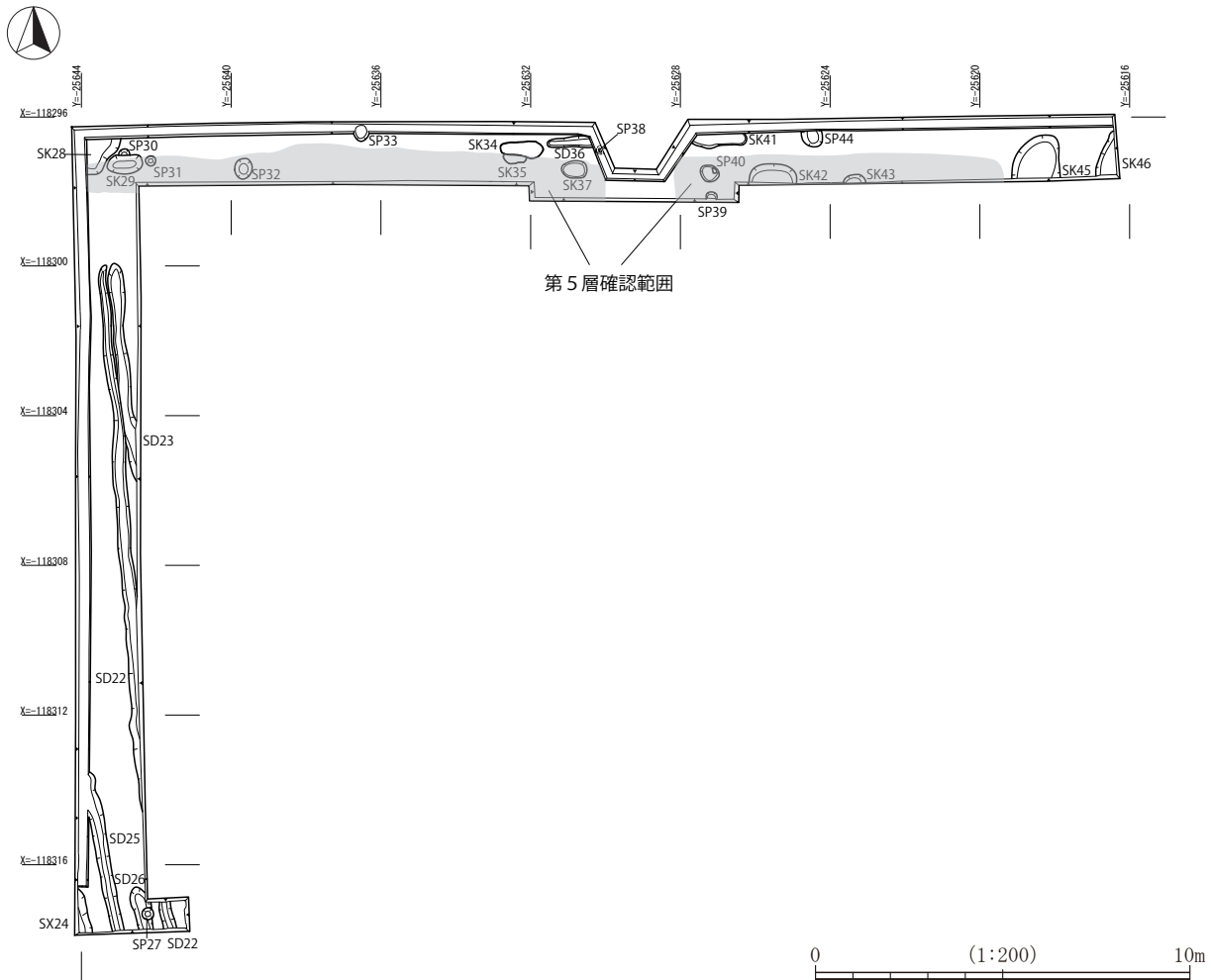


図8 第2遺構面 平面図

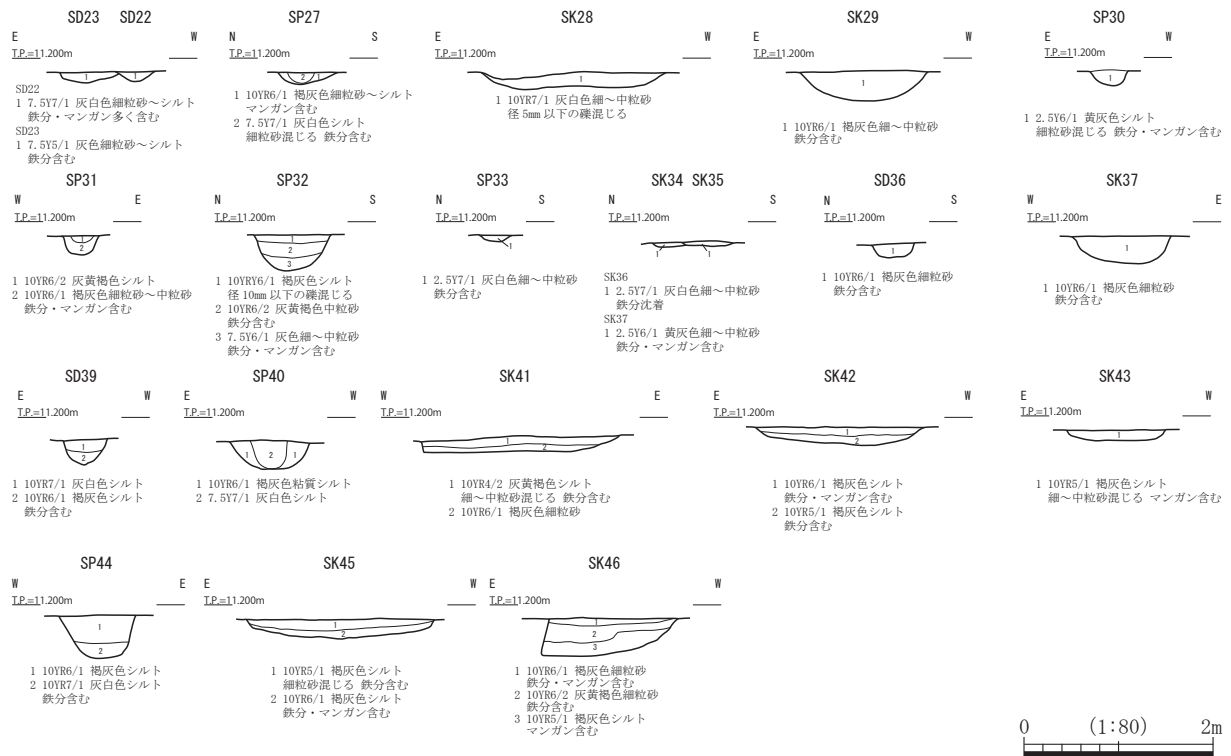


図9 第2遺構面 遺構断面図

含んだ褐灰色シルト(10YR6/1)である。SD26の埋土は鉄分が含まれる灰黄褐色シルト(10YR6/2)である。以上の溝は同一方向に向いているが、埋土の状況からSD22・23と、25・26の間には時期差があると考えられる。

ピット(SP27)

SP27は幅0.45m、深さ0.1m、柱痕の直径は径0.2mを測り、平面形状は円形を呈する。SD26を切っている。

不明遺構(SX24)

南西隅で検出した。埋土は鉄分、マンガンを含んだ灰色中粒砂～シルト(7.5Y6/1)、鉄分を多量に含んだ灰白色シルト(7.5Y7/1)である。付近のSD22、23、25、26と同様の南北方向に向く溝の可能性はある。

下層確認トレンチ(図10・11)

第2遺構面調査後、下層確認トレンチ①を設定し機械掘削を行った結果、灰色粘土層(第7層、第9層～第11層)を確認し、第7層より植物遺存体と遺物の出土が認められたため、その範囲を確認するトレンチ②～④をそれぞれ設定した。結果トレンチ②、③では同様の粘土層が確認されたが、トレンチ④では色調の異なる灰黄色シルト層や粘土層(第13層～第15層)を確認した。トレンチ①では第7層から須恵器、土師器中皿、瓦質土器甕が、トレンチ②では第9層に打たれた状態の木杭が2本、0.4mの間隔で出土した。木杭の内1本は腐食が進み、取り上げることができなかった。土師器皿、瓦質土器甕は16世紀末期に属する。須恵器は長岡京期に属するが、混入品である。

池状遺構(図10)

南北トレンチ西壁土層断面のX=-118300地点付近において、第12層上面からの落ち込みの肩を確認した。下層確認トレンチで確認した土層の堆積状況や出土遺物から見て、16世紀末期に第9層上面を底として調査地北側に池状に広がるように掘削が行われていることが想定できる。掘削の目的は周辺地域の土木工事に関わる土取りであったと考えられ、また埋土内から木杭が出土したことから、埋没以前の存在時においては溜池として利用されていた可能性も考えられる。規模は東西幅25m以上、南北幅4.5m以上、深さ0.4～0.7mである。

III 遺物

出土遺物は須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、中国産青磁、国産陶磁器、瓦、鉄片、木杭等で、遺物の総量はコンテナ約2箱分である。須恵器は概ね長岡京期に属するが、遺構の状況から混入品と考えられる。またX=-118300地点以北の範囲における出土遺物については、池状遺構の埋土から16世紀末期～17世紀初頭に属する遺物が出土していることから、古代及び中世に属する遺物は混入品と考えられる。

遺構出土遺物(図12)

第1遺構面、第2遺構面共に図化が可能なものは極少量であった。

SD01(17)

陶器挿鉢 17は丹波焼挿鉢の口縁部～体部である。口縁部は外側に肥厚し、やや内湾しながら上方へ

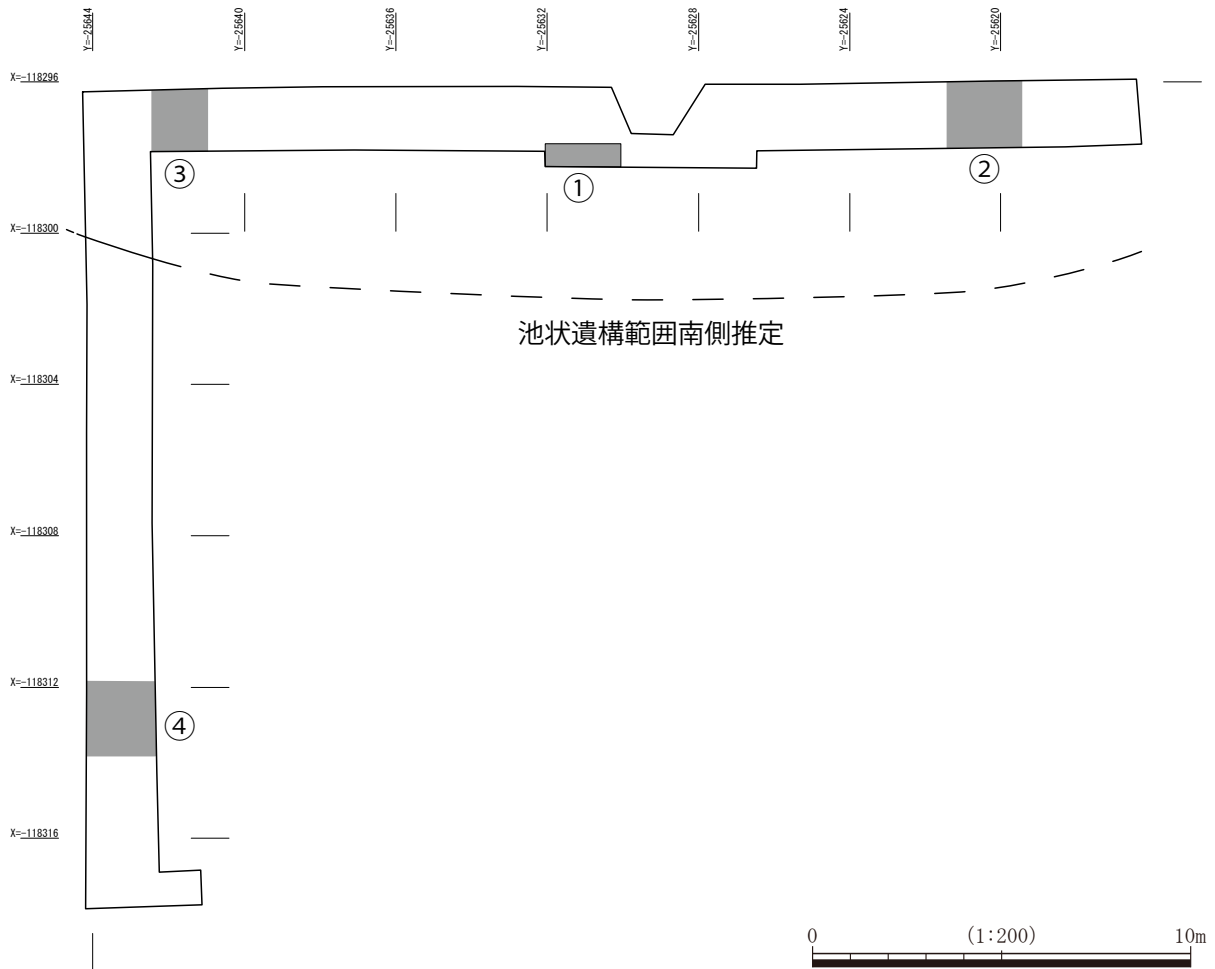
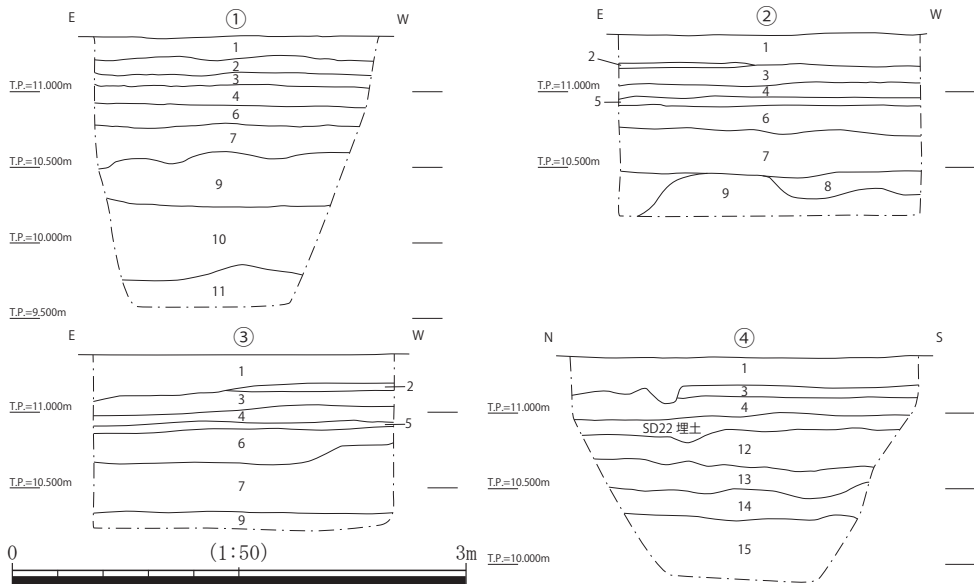


図 10 下層確認トレンチ位置図



- | | |
|--|---|
| <p>第1層 現代耕作土</p> <p>第2層 10YR5/2 灰黄褐色シルト 細粒砂混じる (旧耕土)</p> <p>第3層 10YR6/1 褐灰色シルト 細粒砂混じる 径3cm以下の礫を含む 鉄分沈着 マンガンを含む(床土)</p> <p>第4層 10YR7/1 灰白色シルト 鉄分沈着 マンガンわずかに含む(第1遺構面)</p> <p>第5層 5Y7/1 灰白色細粒砂～中粒砂 径2cm～10cm以下の礫を含む 鉄分沈着(整地土・第2遺構面)</p> <p>第6層 7.5Y7/1 灰白色粘質シルト 鉄分沈着</p> <p>第7層 2.5Y8/1 灰白色粘土 炭化物・植物遺体含む</p> <p>第8層 10Y4/1 灰色粘土 中～極細粒砂混じる 植物遺体・径1cm以下の礫含む</p> | <p>第9層 5Y5/1 灰色粘土</p> <p>第10層 7.5Y5/1 灰色粘土</p> <p>第11層 5Y5/2 灰オリーブ色粘土</p> <p>第12層 10YR6/2 灰黄褐色シルト 極細粒砂～細粒砂混じる 鉄分沈着(第2遺構面)</p> <p>第13層 2.5Y6/2 灰黄色シルト 細粒砂混じる やや粘質</p> <p>第14層 10Y6/1 灰色粘土</p> <p>第15層 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土</p> <p>SD22 7.5Y7/1 灰白色細粒砂～シルト 鉄分・マンガン沈着</p> |
|--|---|

図 11 下層確認トレンチ断面図

と立ち上がる口縁端部を持つ。内面は櫛描きによる播目（8条 / 2cm）が施されているが、使用により著しく摩滅する。外面はロクロナデ、ユビオサエで仕上げる。自然釉が口縁部の一部に付着する。口径 31.0cm、残存高 8.5cm である。16 世紀末期～17 世紀初頭に属する。

SD09(11)

青磁碗 11 は肥前産青磁碗である。体部は丸く立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内面全体と外面の口縁部～体部まで青磁釉を施し、見込みには貫入が見られる。口径 10.1cm、底径 4.5cm、器高 6.6cm を測る。16 世紀末期に属する。

SP21(6、9、21)

土師器皿 6・9 は浅身で口縁部が外に開く形態を持つ。6 は内外共に口縁部はヨコナデ、底部はナデを施す。口径 9.4cm、底径 6.2cm、器高 1.0cm を測る。9 は口縁端部内面にわずかに窪みを持つ。内面は口縁部～体部までをヨコナデし、底部はナデで仕上げる。外面は口縁部をヨコナデ、体部～底部をナデにより仕上げる。口径 16.0cm、底径 7.4cm、器高 2.7cm を測る。6・9 はそれぞれ 16 世紀中頃に属する。

鉄製品 21 は鉄釘である。断面は方形で、胴部のみ残存し頭部及び先端は欠失している。残存長 4.0cm。断面は先端付近で 0.9cm × 0.8cm である。

包含層出土遺物

第 3 層 (12)

青磁碗 12 は肥前青磁碗である。体部は丸く立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。内外共に青磁釉を施す。口径 10.8cm、残存高 5.0cm を測る。18 世紀前半に属する。

第 4 層 (1、3、14～16、18、19)

土師器皿 1 は口縁部が外反し、端部は丸く収める。底部は内面はナデ、外面は底部をユビオサエのちナデで仕上げる。口縁部は内外面共にヨコナデを施す。口径 8.0cm、底径 3.8cm、器高 1.4cm を測る。3 は立ち上がりは丸く、口縁端部は丸く収める。底部は内外面共にナデ、口縁部は内外面共にヨコナデを施す。口径 8.6cm、器高 1.7cm を測る。1、3 はそれぞれ 16 世紀中頃に属する

瓦質土器羽釜 14、15 は口縁部～体部である。14 は河内・和泉型である。口縁部は丸みを持ちながら直線的に成形され、ヨコナデによる段を持つ。口縁端部にわずかに窪みを持つ。鏝部は水平に伸び、端部はナデにより若干丸く仕上げられる。内面及び体部外面は風化により調整不明。口径 24.0cm、残存高 4.9cm を測る。15 は京都型である。直線的に立ち上がる口縁部で、端部はわずかに窪みを持つ。鏝部はヨコナデによる成形で、体部との接着はユビオサエのみで行われているため、接合痕が明瞭に認められる。内面はほぼ風化しているが、体部に横方向のハケメがわずかに認められる。口径 25.6cm、残存高 8.9cm を測る。14、15 はそれぞれ 16 世紀中頃に属する。

瓦質土器風炉 16 は口縁部～肩部である。直立する口縁を持ち、口縁端部は外側に肥厚し、肩は張る。内面及び体部外面は風化により調整不明。口径 23.6cm、残存高 5.7cm を測る。16 世紀中頃に属する。

陶器播鉢 18 は丹波焼播鉢の底部である。内面は櫛描きによる播目（6条 / 1.7cm）を施す。一部自然釉がかかる。外面はナデで仕上げる。残存幅 7.3cm、残存厚 0.9cm を測る。

陶器甕 19 は丹波焼甕の口縁部である。口縁部は内面に段を持ち、端部は外側に肥厚し、外面は下方

へと拡張し段を形成する。内外面共にロクロナデにより仕上げる。口径 36.0cm、残存高 4.8cm を測る。16 世紀中頃に属する。

第5層（2、4、10、13）

土師器皿 2は口縁部の内面がヨコナデによりわずかに窪む。体部内面はナデ、体部外面はユビオサエのちナデを施す。口径 8.6cm、残存高 1.4cm を測る。4は口縁部がヨコナデによりわずかに外反しながら大きく外側に開く。体部内外面共にナデで仕上げる。口径 11.8cm、残存高 1.4cm を測る。2、4はそれぞれ 16 世紀中頃に属する。

土師質土器鍋 10は口縁部～体部である。口縁部はヨコナデにより外側に折り曲げ、端部を上方につまみ上げる。体部は内面をナデ、外面をユビオサエで仕上げる。外面は使用により全面煤けている。口径 31.4cm、残存高 7.0cm を測る。16 世紀中頃に属する。

青磁碗 13は龍泉窯系青磁碗の体部～底部である。体部外面に蓮弁文を刻む。内外面共に青磁釉を施す。高台内部は露胎である他、二次被熱を受けているため、灯明皿として使用されていたと考えられる。底径 5.2cm、残存高 4.6cm を測る。16 世紀前半～中頃に属する。

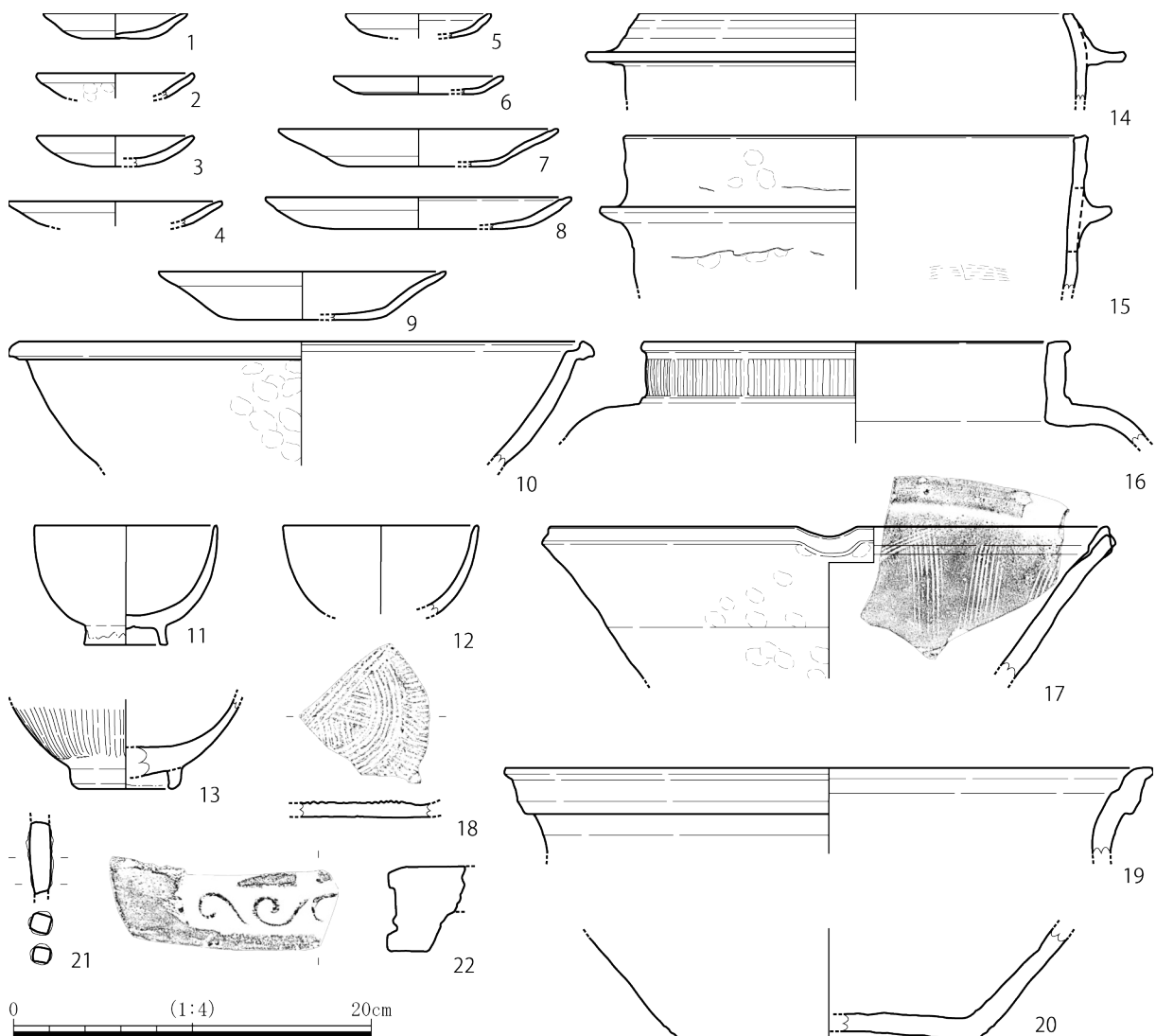


図 12 出土遺物実測図

第6層（7、20、22）

土師器皿 7は浅身で器壁は薄手である。口縁部はヨコナデによりゆるく外反し、端部は丸く収め、内面はわずかに窪む。底部内外面はナデで仕上げる。口径15.6cm、底径7.8cm、器高2.1cmを測る。16世紀末期に属する。

陶器甕 20は甕の底部で、丹波焼かと思われる焼締め陶器である。底部は中心付近が4mm程度浮き、体部は外側に向かって大きく開く。内外面共にロクロナデを施す。外面にはユビオサエの痕が認められ、底面はナデにより仕上げる。底径16.8cm、残存高6.2cmを測る。16世紀後半に属する。

軒平瓦 22は軒平瓦である。平瓦部は欠失している。均整唐草文の中心飾りは欠失しているが、下端から展開するC字状の唐草文が3回反転すると考えられる。顎部は貼り付けにより成形される。凹面に煤が付着しており、二次被熱を受けている。瓦当部は残存長12.6cm、厚さ3.3cm、残存幅4.7cmを測る。17世紀前半～中頃に属する。

池状遺構出土遺物（8、23、24）

土師器皿 8は浅身で、口縁部～体部は大きく外側へ開く。口縁部はヨコナデにより内外共に窪み、内面には段を作る。端部は丸く収める。底部内外面共にナデで仕上げる。口径17.0cm、底径9.3cm、器高1.8cmを測る。16世紀末期～17世紀初頭に属する。

瓦質土器甕 23は口縁部を外側に肥厚させ、わずかに下方に向けて開く。内外面共にナデにより仕上げる。底部内面にはユビオサエが認められる。口径56.8cm、底径38.8cm、復元高60.0cmを測る。16世紀末期～17世紀初頭に属する。

木製品 24は木杭である。先端は欠失している。断面が円形の木材で、加工部の断面形は六角形である。残存長30.4cm、幅5.5cmを測る。

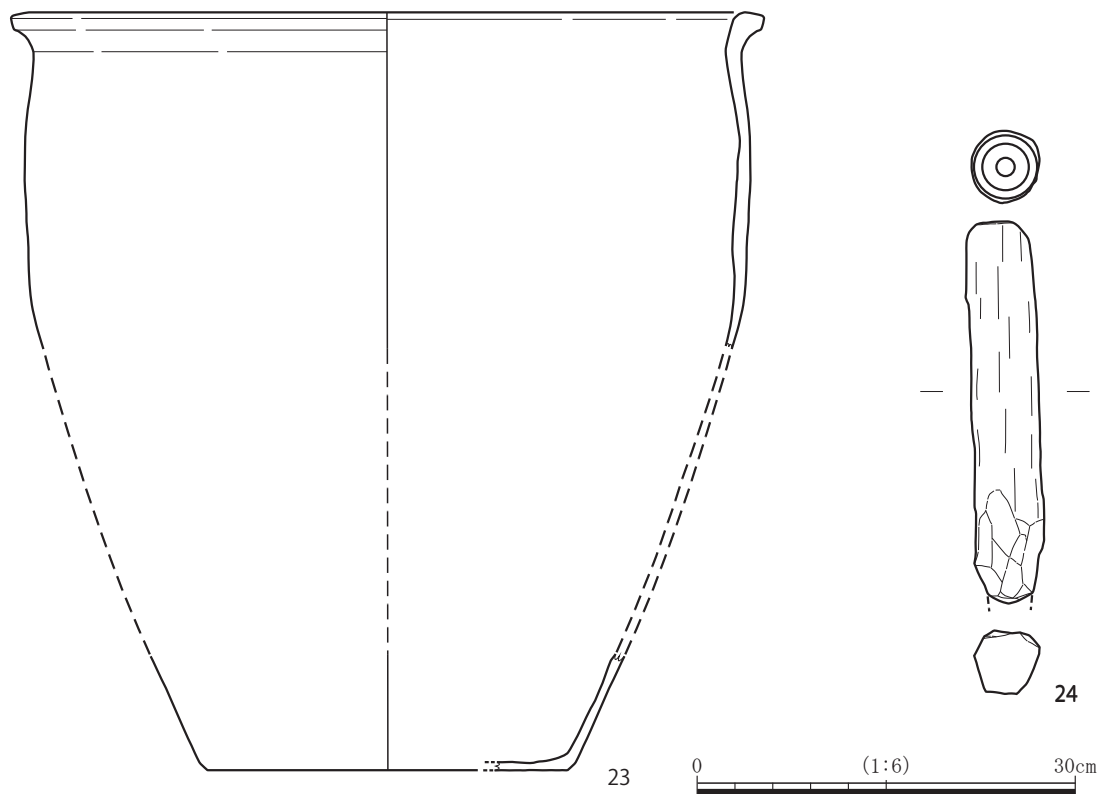


図13 池状遺構出土瓦質土器甕・木杭 実測図

IV まとめ

今回の発掘調査では遺構面を2面確認した。検出した遺構はピット21基、土坑12基、溝12条、不明遺構1基、池状遺構である。根石が残るピットを3基検出したが、調査範囲が狭いことから建物のプラン復元には至らなかった。

調査地は長岡京跡推定復元における東三坊坊間東小路が通る地点であること等、長岡京期の遺構検出が予想されていたが、X=-118300地点付近以北の範囲では、16世紀末期頃に池状遺構形成に伴う掘削を受けていることから確認することができなかった。調査地南西側の南北トレンチの北端を除く範囲においては掘削の影響を受けておらず、遺構検出面である第12層は、その土質やレベルから文化財保護課の試掘結果における長岡京期遺構検出面に相当するものと考えられるが、調査範囲内においては各遺構の状況や出土遺物がほぼ認められないことから、長岡京期の遺構と断定できるものはなかった。

平成25～26年に元興寺文化財研究所が行った調査によって、調査地南東側において16世紀末期～17世紀初頭に大規模な盛土が行われ礎石建物が建てられていることや、17世紀第二四半期に廃絶した羽束師菱川城の濠の埋戻しを行っている事が確認されていることから、周辺地域において土木工事が盛んに行われていたことが想定され、そこには多くの土量が必要であったことが考えられる。このことから池状遺構は、周辺地域の土木工事に関わる土取りが行われたことよって成立し、その埋土から自然堆積により埋没したと見られる。また木杭が出土したことから存在時においては溜池として利用された可能性も考えられる。17世紀前半の埋没後は整地が行われ、建物が造成されている。第1遺構面（第4層）、第2遺構面（第5層）、土取り坑のそれぞれの間には大きな時期差は認められず、また上層の床土（第3層）より18世紀前半の肥前産青磁碗が出土していることから、短期間で整地から建物の造成、廃絶、そして農耕地への転換が行われたと考えられる。

参考文献

- 馬瀬智光 2014 「V-10 長岡京左京四条三坊十三・一四町・四坊三・四町跡・羽束師菱川城跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年 -九州近世陶磁学会10周年記念-』
- 國下多美樹 2013 『長岡京の歴史考古学的研究』吉川弘文館
- 黒須亜希子 2017 「長岡京跡左京第585次（四条三坊十三町跡）・羽束師菱川城跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局
- 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究 -日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀』京都編集工房
- 佐藤亜聖・宮崎真由・下高大輔・川本浩三・木沢直子 2015 『羽束師菱川城跡・長岡京跡（長岡京跡第561次調査）』公益財団法人元興寺文化財研究所
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 中西薫 2009 『丹波の名陶』丹波古陶館
- 山川均・濱口芳郎 1991 『古屋敷遺跡 第3次発掘調査概要報告』大和郡山市教育委員会
- 山崎信二 2008 『近世瓦の研究』同成社



1. 調査前全景（南西から）



2. 東西トレンチ全景（西から）



2. 南北トレンチ全景（北から）



1. 拡張部全景（西から）



2. 下層確認トレンチ①南壁断面（北から）



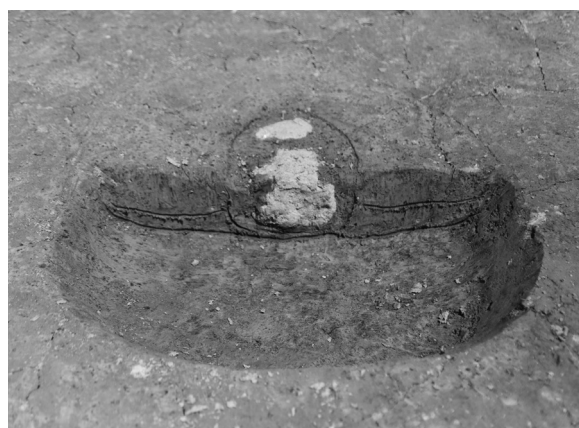
3. 下層確認トレンチ④東壁断面（北西から）



3. 軒平瓦出土状況（北から）



1. SD09 土層断面（南から）



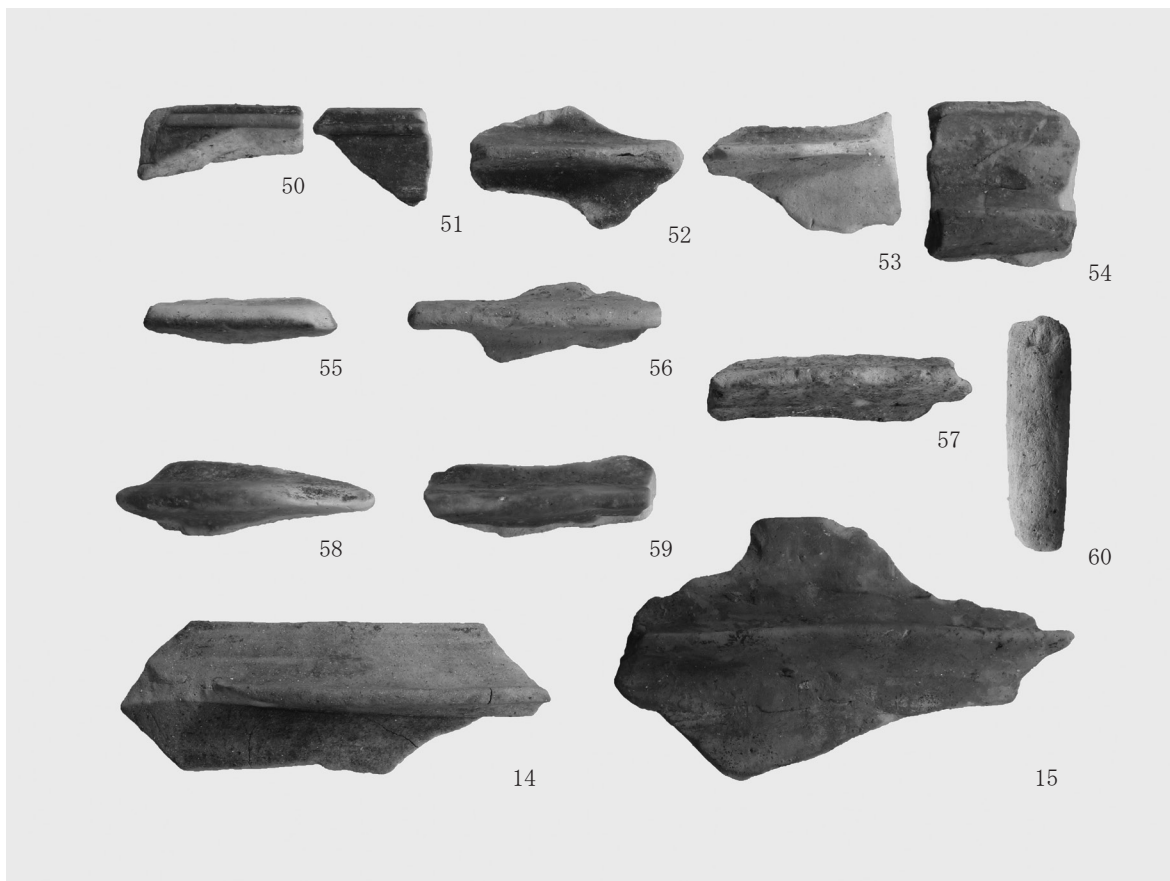
2. SP19 土層断面（西から）



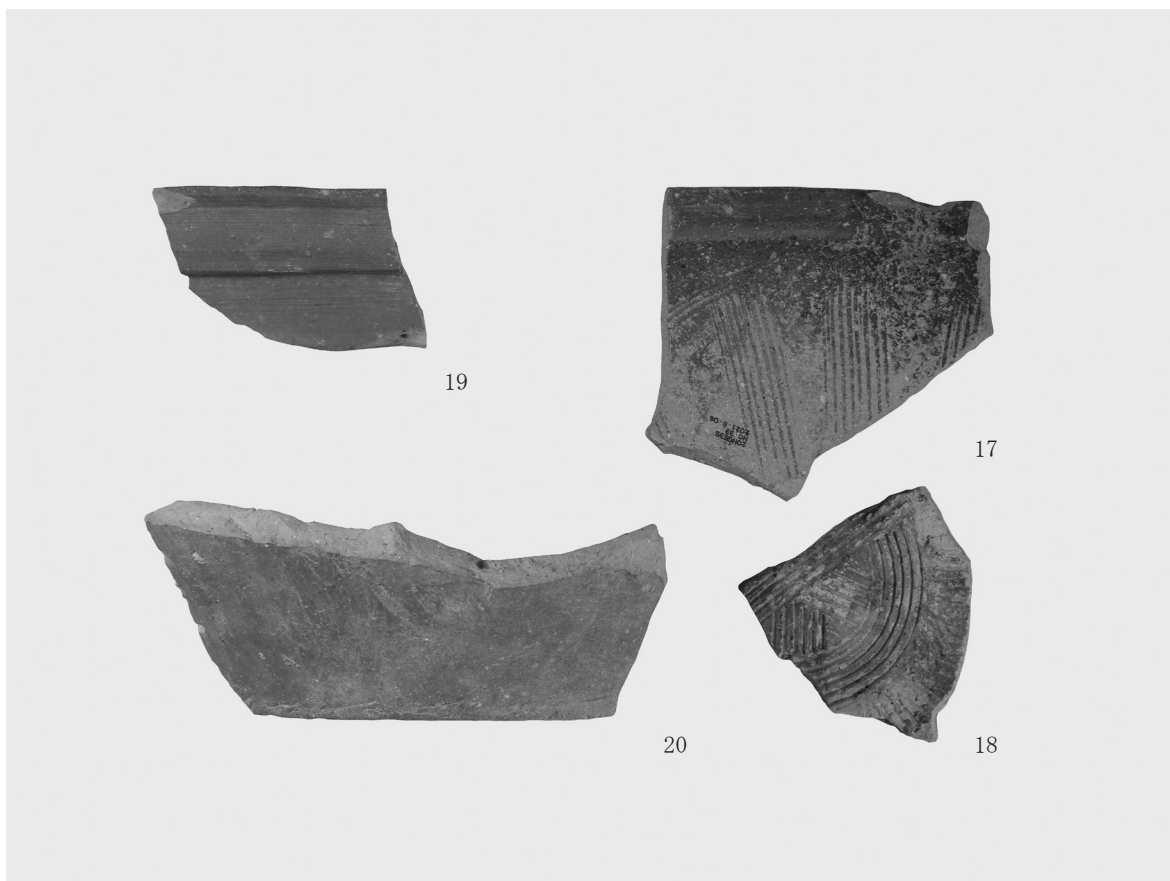
3. SD22, 23 土層断面（北から）



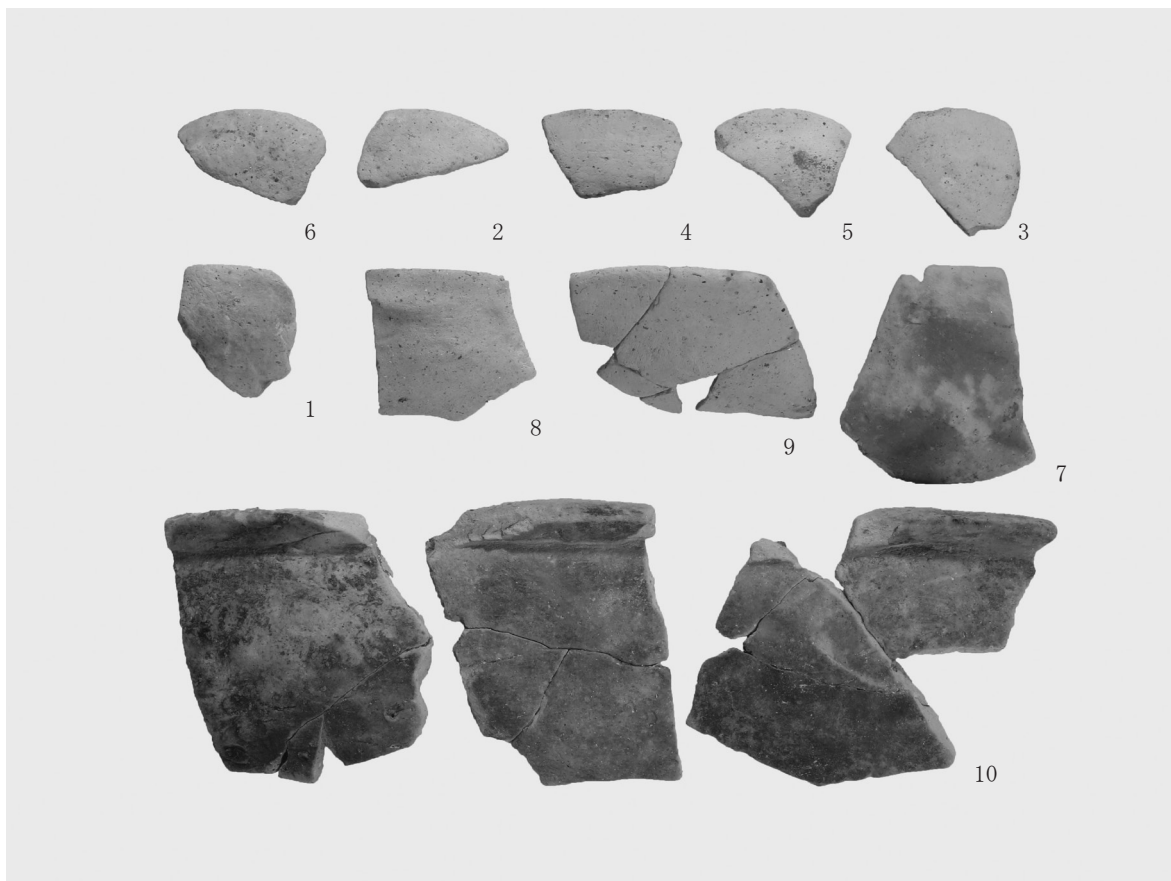
2. SP40 土層断面（北から）



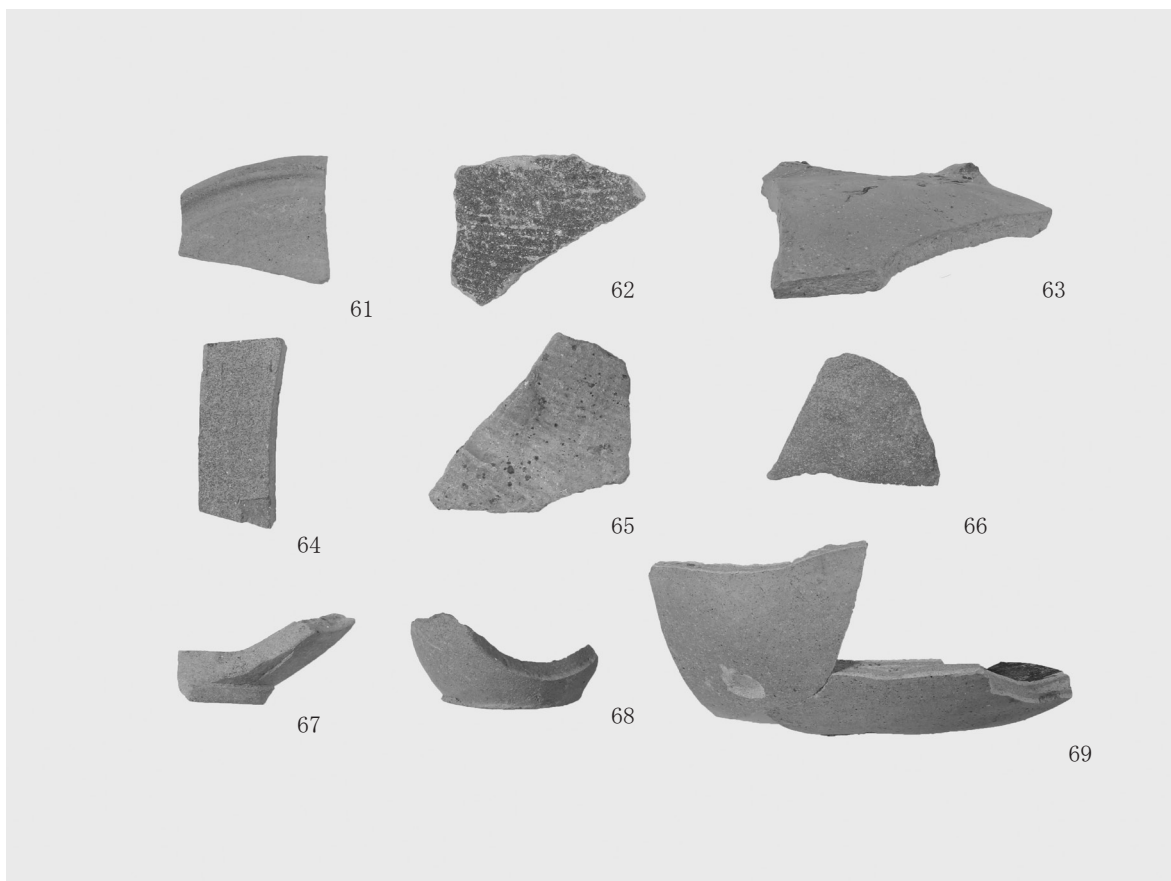
瓦質土器羽釜 (14・15・50～59)・脚 (60)



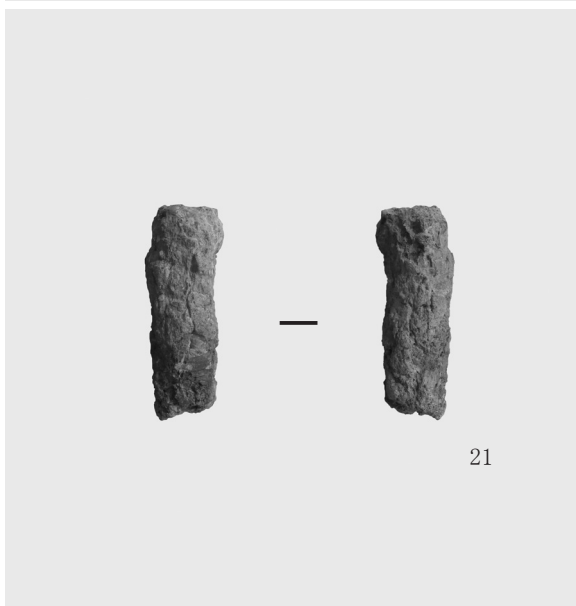
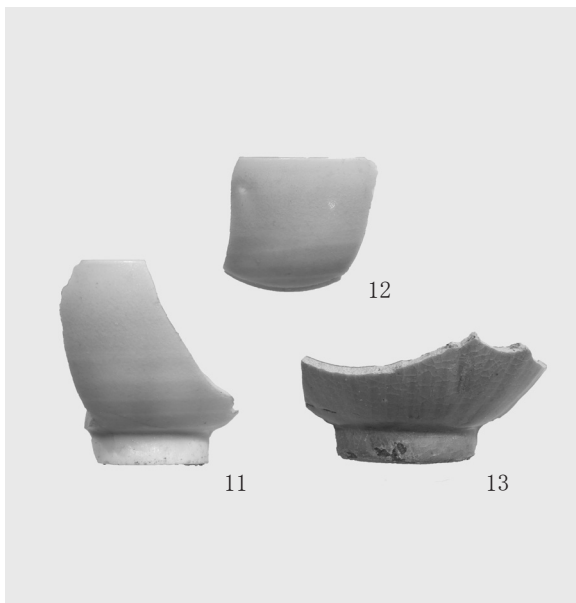
丹波焼甕 (19・20)・播鉢 (17・18)



土師器皿 (1 ~ 9) ・ 土師質土器鍋 (10)



須恵器蓋 (61) ・ 甕 (62・63・65・66・69) ・ 壺 (67・68) ・ 円面硯 (64)



瓦質土器風炉 (16) ・甕 (23) ・軒平瓦 (22) ・青磁碗 (11 ~ 13) ・鉄釘 (21) ・木杭 (24)

報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうさきょうしじょうさんぼうじゅうよんちょうあと だい645じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	長岡京左京四条三坊十四町跡 第645次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	江崎周二郎 影山美智与 市田英介 松田直子							
編集機関	株式会社 地域文化財研究所							
所在地	〒578-0941 大阪府東大阪市岩田町1丁目17番9号 TEL 072-968-7321							
発行年月日	令和4年(2022)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうさきょうしじょうさんぼう 長岡京左京四条三坊 じゅうよんちょうあと 十四町跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 はづかしのかわちやう 羽東師菱川町 544-1	26109	1199	34度 55分 59秒	135度 43分 9秒	令和3年 7月26日～ 令和3年 8月25日	97.4㎡	宅地造成
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ながおかきょうさきょうしじょうさんぼう 長岡京左京四条三坊 じゅうよんちょうあと 十四町跡	都城跡	長岡京期	溝・ピット・土坑・ 池状遺構	須恵器、土師器、瓦 質土器、陶磁器、瓦、 杭				

長岡京左京四条三坊十四町跡

第645次発掘調査報告書

令和4年3月31日発行

編集・発行 株式会社 地域文化財研究所
〒578-0941 東大阪市岩田町1丁目17番9号
TEL 072-968-7321

印刷・製本 株式会社 地域文化財研究所